



「アジェンダ21」と「ローカルアジェンダ21」

1. 「アジェンダ21」とは

21 世紀に向け持続可能な開発を実現するために各国及び各国際機関が実行すべき行動計画を具体的に規定するものとして、1992 年（平成 4 年）6 月にブラジルのリオ・デ・ジャネイロで開催された国際会議（通称：地球サミット）で採択されたものです。

大気、水、廃棄物などの具体的な問題についてのプログラムとともに、この行動を実践する主要グループの役割強化、財源などの実施手段のあり方が規定されています。

出典：平成 19 年版環境・循環型社会白書

2. 「ローカルアジェンダ21」とは

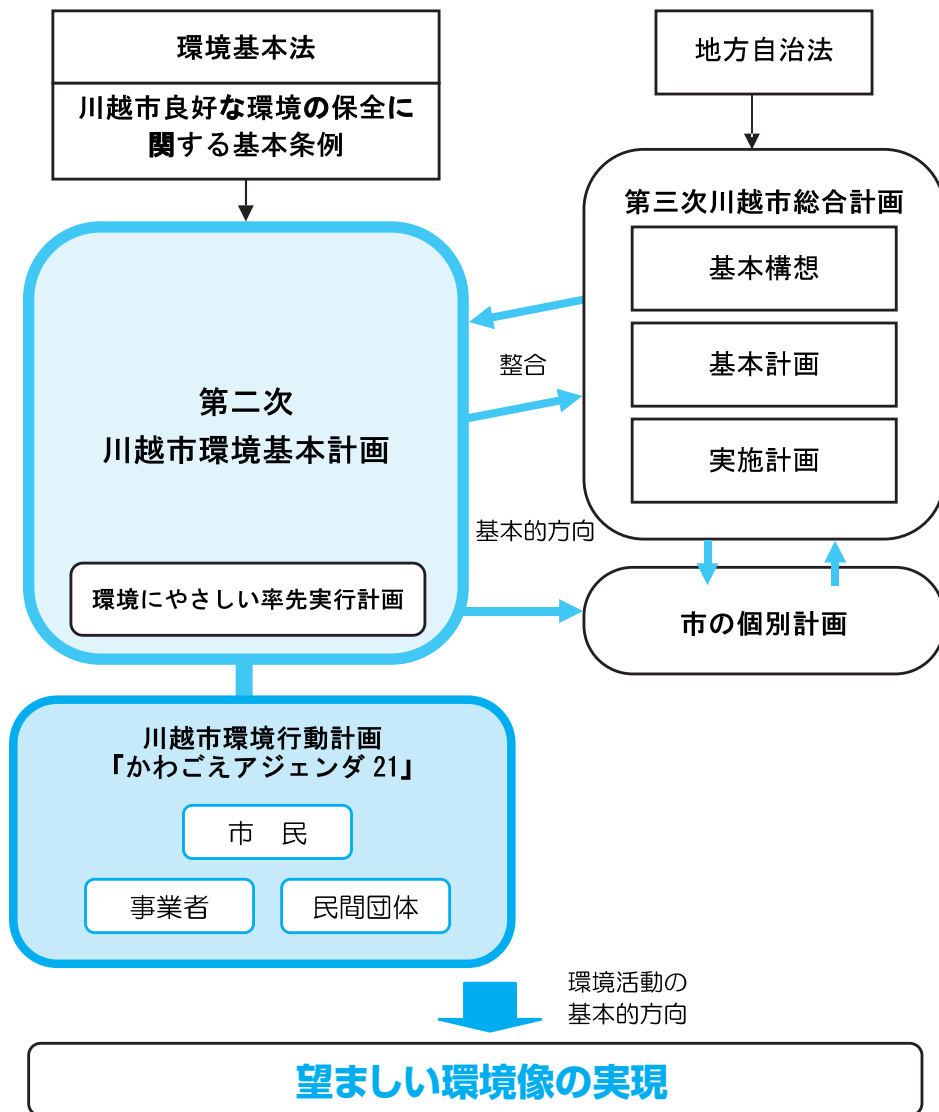
アジェンダ 21 が目指す持続可能な開発の実現に向けて、地域の各主体（市民・事業者・民間団体・行政）が参加、課題を共有し解決するための行動計画です。

この川越市環境行動計画「かわごえアジェンダ21」は、第二次川越市環境基本計画と併せて、このローカルアジェンダ21の川越版となるものです。



川越市環境行動計画「かわごえアジェンダ21」の位置づけ

川越市は、第二次川越市環境基本計画の中で、「市民、事業者及び民間団体に対しては、将来の望ましい環境像の実現に向けて、日常生活や事業活動における環境の保全・創造のための環境配慮行動計画などを別途策定します。」と記しています。第二次川越市環境基本計画と川越市環境行動計画「かわごえアジェンダ21」の2つの計画が車の両輪となり、第三次川越市総合計画や他の個別計画と整合を図りながら将来の「望ましい環境像」の実現を目指します。



※ 「望ましい環境像」とは

第二次川越市環境基本計画において「みんなで作る自然・歴史・文化の調和した人と環境にやさしいまち」と定められています。(資料編参照)



第三次川越市総合計画



第二次川越市環境基本計画



川越市環境行動計画「かわごえアジェンダ21」の目的・推進体制・構成

1. 目的

川越市環境行動計画「かわごえアジェンダ21」（以下「本計画」といいます。）は、川越市が策定した第二次川越市環境基本計画（以下「環境基本計画」といいます。）と連動して、川越市における市民、事業者、民間団体の各主体が取り組むべき、また行政を含めて4者が協働で取り組むべき具体的な行動を定めるものです。

これを、多くの市民や事業者など、川越市におけるあらゆる主体に活用してもらうために、わかりやすい形で提供するものです。

本計画は、環境基本計画と「目標年度」「対象とする環境の範囲」「望ましい環境像」「環境目標」を共有するとともに、「施策内容」との連動を図ることで、川越市に関わるすべての人や事業者等が、「望ましい環境像」の実現に向けての取組を協働して行うことを目的としています。（資料編参照）

2. 推進体制

多岐にわたる現在の環境問題を解決するためには、行政だけでなく、市民、事業者、民間団体の取組と協力が不可欠です。そこで、市民、事業者、民間団体、行政がパートナーシップを形成し、それぞれが役割を理解しつつ協働して環境保全活動を行い、環境基本計画が定める将来の川越市の「望ましい環境像」を実現していくための組織として「かわごえ環境ネット」が、平成12（2000）年8月5日に設立されました。この「かわごえ環境ネット」を中心に市民、事業者、民間団体そして市との協働により、本計画を総合的かつ効果的に推進していきます。

3. 構成

本計画は、「望ましい環境像が実現したときの川越のようす」「120の行動提案」「協働で取り組むべき10の重点プロジェクト」「環境に配慮した行動チェックシート20（市民編・事業者編）」の4部構成になっています。

「望ましい環境像が実現したときの川越のようす」は、環境基本計画で掲げられている「望ましい環境像」を、より具体的なイメージとして示しています。

「120の行動提案」は、環境基本計画の5つの目標を「資源・エネルギー」「交通・健康」「自然」「まち」「活動・情報」という5つの大項目に置き換えて、それを更に30の中項目に分類し、中項目ごとに、「各個人または組織が実行すること」「個人・組織が他の個人・組織に対し啓発・普及を図ること」「個人・組織が行政と協働して実行すること」の3つの観点から行動提案を掲げています。

「協働で取り組むべき10の重点プロジェクト」は、「120の行動提案」における「個人・組織が行政と協働して実行すること」を集約して、市民、事業者、民間団体、行政が協働で取り組むべき10の重点項目を掲げ、環境基本計画の目標年度〔平成27（2015）年度〕に向けて、協働して実施すべきことの道しるべとして活用を図っていきます。

「環境に配慮した行動チェックシート20（市民編・事業者編）」は、「120の行動提案」の「各個人または組織が実行すること」をもとに、市民（民間団体を含む）、事業者が行動すべきことを具体的に例示し、チェックリストとして示しています。これを活用することにより、各個人・組織が継続的な活動を実施できるようにするとともに、情報の共有を図れるようにします。



1. 市民生活のようす

家庭で使用するエネルギーは、太陽光発電や**燃料電池**、ヒートポンプなどのエネルギー技術の進展により、多くの電気や熱源をまかなえるようになってきている。ガソリン、灯油から天然ガスに、また**バイオ燃料**などの低公害で再生可能なエネルギーに転換され、化石燃料の使用は限りなく少なくなっている。

市民は、安全、安心な商品を提供している商店から、野菜、惣菜、鮮魚、精肉などの日常の食料品を、自分の容器や買い物袋を持参して購入している。またこれらの店は、地産地消により循環型社会の拠点となっている。

市内で販売されている多くの商品には、**エコマーク**や企業が自主宣言した**環境ラベル**がつけられ、市民、事業者、行政が**グリーン購入**を当たり前のように行っている。

「小江戸川越」が生活面でも注目され、循環型社会のモデルとされる江戸時代の生活に習って、ものは大事に長く使い、フリーマーケットや古着販売を活用し、使えなくなるとリサイクルして、ほとんどごみにならなくなっている。

川越市民は、誰よりも「もったいない」の言葉の深さを知っている。

2. 事業所のようす

事業所においても化石燃料の使用は少なくなり、また**コージェネレーション**によりエネルギー効率の高い電気を作り、かつ温水などの余剰エネルギーは、地域にも供給されている。

工業地域では、環境にやさしい再資源化原料を使用し、エネルギーの地域内効率化が図られている。

また、生産に伴う廃棄物も分別回収し再資源化され、各工場が関わり合いをもって資源循環工業地帯を形成している。また、工業用水が導入され、地下水のくみ上げは少なくなっている。それに伴って湧水が復活し、市内に潤いがよみがえっている。

事業者は、大気や川など自然環境への化学物質の排出を減らすよう管理している。また、市民との**リスクコミュニケーション**が継続的に行われることにより、化学物質に対する意識が向上し、化学物質の使用量を減らしている。

工場やオフィス、学校では、国内外の各種環境管理システムの導入や川越市独自の**エコストア・エコオフィス**認定制度などのしくみを生かし、材料の調達からものづくり、配送にいたるまで、あらゆる事業活動で環境に与える悪い影響を把握し、改善する努力が継続的に行われている。

3. 自然のようす

事業所や家庭からの排水は、ほとんどが下水道や浄化槽で処理され、川や水路はきれいになりつつある。また、農家でも減農薬農法によりきれいな農業排水になり、本来の姿を取り戻した小川では市民が水と遊んでいる。そこでは、高度成長とともに姿を消したホタルが姿を現し、川のまちとしての姿を取り戻しつつある。

武蔵野の面影を残す雑木林は、市民の森や(仮称)川越市森林公園のような自然を生かした公園として保全され、憩いの森として親しまれている。これらを、市民や事業者が行政とともに維持管理している。

4. まちのようす

川越3駅（川越駅、本川越駅、川越市駅）から点在する伝統的商業地域、川越城址周辺地域、喜多院周辺地域を経て駅に戻る遊歩道は、観光客にいやしを提供している。また、走行する車両は、**低公害車**や**バイオ燃料車**となっている。

列車には自転車を積むことができ、市民、事業者、行政の協働により実現した**環境負荷**の少ない市内循環バスは、市民の足として愛用されている。

自動車の排気ガスなどが少なくなることにより空気がきれいになり、かつ、屋外広告物が規制されて、**光害**がなくなり、夜空は満天の星空に包まれている。

脇道に入れば道ばたに草花や家庭菜園、屋上緑化など、市内のいたるところで緑に出会うことができる。

緑あふれる美しいまち川越を吹き抜ける風は、市民に涼をもたらす。

川越は、歴史や文化を大切に、環境を考えた交通システムの構築などで**環境負荷**の少ないまちづくりが進められた環境先進都市として、観光客が国内外から年間1,000万人以上訪れる日本を代表する観光都市になっている。

歴史的な町並みに学び、川越市内各所でまちづくりのルールが作られ、地域色が豊かで美しい景観が作られつつある。

これらの環境対策からもたらされる快適性によって、まちが活気づいている。

5. 市民活動のようす

市内の学校では環境学習の時間が設けられ、家族やグループでは環境のことがよく話し合われている。あらゆる環境に対する経験が情報システムを活用して共有され、市民、事業者、行政、そして大学をはじめとする学校との協働によって、環境を良くする活動が活発に行われている。

このように将来の川越では、持続可能な社会に向けた歩みを続けている。